

9月2日 年間第22主日

シラ 3:17-20,28-29 ヘブ 12:18~24 ルカ 14:1,7~14

1. ルカ

主イエスがあるファリサイ派の有力者の家の食事に招かれたときの話を、ルカ福音書は伝えています。招かれた多くの客の中には、やはり相当の各界の有力者たちがいたものと思われます。このような人々が上席に座っていました。

そこでイエスは一つの譬え話をして、神の国についてお教えになりました。

v.8 「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。」

v.11 「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

一見したところ、これは“謙遜であれば得をする”という美德を語っているように思えます。そして今朝の第一朗読であるシラ書でも、同様の忠告が語られていました。

しかしルカ福音書はこの譬え話を、私たちがより適切に解釈できる前後関係の中に置いています。イエスは言われました。

v.14 「あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

主イエスはこの謙遜の譬え話を、神の国について教えるために用いられたのでした。自分自身を、神の国で上席に座る資格があると考える人々を、主イエスは非難されました。神の国での上席は神が与えてくださるものであって、人間が選び取るものではない。それは恵みであって、資格ではないのです。

2. シラ

このように私たちは今朝、神の国のことを教える“キリストの言葉”(ロマ 10:17)を、三つの朗読聖書から聞かされます。

v.18 「偉くなればなるほど、自らへりくだれ。そうすれば、主は喜んで受け入れてくださる。」

v.20 「主はへりくだる人によってあがめられる。」

主イエスが「心の貧しい人々は、幸いである」(マタ 5:3)と教えられたとき、きっとこのシラ書のことを指しておられたに違いありません。謙遜は、キリストの福音の主題である神の国でこそ喜ばれるのです。

3. ヘブ

今朝私たちが学んでいる謙遜についての教えは、このように将来の神の国の先取りとしての私たちのミサについての教えに他なりません。キリスト御自身の“奉仕による救いの業”を記念する感謝の祭儀を通して、司祭も会衆も、またすべての奉仕者たちも、謙遜を学ぶことはいつも新しい課題なのです。

奉献文の主文に当たる、記念唱に続く文章の主語「わたしたち」が、第一奉献文では「わたしたち・・・

2001年9月(主日C年)

奉仕者と聖なる民・・・」と言い換えて補足されていることから分るように、ミサとは司祭と共にわたしたち・・・奉仕者と聖なる民・・・が一つになって、主の過越の記念をささげる神奉仕です。そしてその聖なる民に期待されているものこそが、謙遜なのではないでしょうか。

21世紀に入った私たちの教会の“典礼奉仕者の養成”(典礼憲章29)についても、それが「主はへりくだる人によってあがめられる」(シラ3:20)ことの証しとなるようなものでありたいものです。

アーメン、ハレルヤ。

9月9日 年間第23主日

知 9:13~18 ファレ 9~17 ルカ 14:25~33

1. ルカ

ルカ福音書独特の語り方に素直に耳を傾けると、私たちは“一切を捨てる”(v.33)という信仰の姿勢がひととき強調されていることに気がきます。キリスト信仰とはキリストの苦しみにも共に与かることであり、肉親との結びつきや自らの命までも犠牲にする覚悟を要求されるものであることを、今朝のテキストは念を入れて説明してくれているのです。

vv.26-27は マタ 10:37-38 の並行記事なのですが、ルカ福音書はそこに“妻”をも加えています。また v.27 は元来 マコ 8:34(マタ 16:24、ルカ 9:23)が出所と考えられる句で、そこではイエスの死と復活の予告の言葉と結びついて語られています。

「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」(ロマ 4:25) 「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」(ロマ 6:4)

これらの使徒パウロの言葉と同じ内容が、ここではルカ福音書独特の語り方で展開されているのです。

2. ファレ

ファレモンへの手紙の成立事情を簡単に説明しておきましょう。

コロサイの富める信徒ファレモンの奴隷オネシモが逃亡してローマに行き、そこで監禁の身となっているパウロに出会って信仰に入りました。オネシモは非常に有能な人物であったので、パウロのもとで福音の宣教のために働くようになりました。パウロは自分がかつて信仰に導いたファレモンに対して、彼のもとから逃亡した奴隷を自分のもとで無断で働かせることを心苦しく思っていたのですが、ちょうどテキコがローマからアジア方面に戻る機会に、オネシモを主人ファレモンのもとに帰そうと考えました。そこで事情を釈明してオネシモのために執り成しをする目的で、この手紙を書いたのです。(コロ 4:7-9 参照)

この手紙は分りやすい文章で書かれていて、だれでも使徒パウロの牧者としての細やかな配慮と愛情を容易に読み取ることが出来るのですが、一つだけ現代人には見落とされてしまう事柄が隠れています。それは当時の奴隷と主人との関係についての事柄です。

この時代の奴隷は、その主人の財産の一つでした。単なる肉体労働者だけではなく、オネシモのような有能な知的労働者の奴隷もいたのです。当然一人一人の奴隷の財産的価値には、ピンからキリまであったことでしょう。主人は自分の財産である奴隷に対して生殺与奪の権を持っていました。ですから有能で重用されている奴隷が主人のもとから逃亡するということは、現代風に表現すれば、ちょうどある会社の重役の一人が、自分の会社の重要な技術情報を盗んでライバル会社に寝返った……というような、背信行為

でありました。主人にとっては、そんな逃亡者を許して再び受け入れるなどということは、通常では考えられないことだったので。主人はその奴隷を殺すことも出来るし、また高価に売却して損害の穴埋めをすることも出来ました。

このように考えると、使徒パウロがフィレモンにこの手紙で願い勧めていることは、正にキリストの死にあずかる者として、「自分の十字架を背負う」(ルカ 14:27) ことであつたことが分ります。奴隷オネシモを今や一人のキリスト者として受け入れるということは、主人フィレモンにとっては十字架以外の何ものでもありませんでした。

3.

ルカ福音書の今朝のテキストは、キリスト者の条件について必ずしも大げさに語っているのではなくて、むしろ初代教会の信者たちの実体験や実感に裏付けされた宣教の一部であることを、現代の私たちはフィレモンへの手紙の助けを借りて理解しましょう。

現代のキリスト者である私たちも、各自の人生の途中のどこかで、「腰をすえて計算し」「腰をすえて考えてみる」ときに出会うかもしれません。そのときには、「神の知恵となり、義と聖と贖いとなられた」キリスト(1コリ 1:30) が、私たちを助け導いてくださることを願いましょう。

「主よ、あわれみたまえ。キリスト、あわれみたまえ。主よ、あわれみたまえ。」

アーメン、ハレルヤ。

9月16日 年間第24主日

出 32:7～14 | テモ 1:12～17 ルカ 15:1～32

第二バチカン公会議から始まった典礼刷新によって新しくなった私たちの“ミサ典礼書”では、それ以前の典礼書では廃止されていたいくつかのものに、再び本来の重要性が与えられて、「聖なる教父たちによる本来の基準に則して復元され」(典礼憲章 50) ました。

その一つがミサの初めに行われる“回心の祈り”、すなわち神と兄弟からの赦しを求める祈りです。司祭の案内で一つの群となり、神の前に出る民は、罪にまみれた人間たちであることを会衆一同が“告白する”と、それに続いて“罪のゆるしの言葉”が司祭によって唱えられます。

今朝の三つの朗読聖書の箇所は、この“回心の祈り”との関連で理解するのが適切であるように思えます。

1. ルカ

ルカ福音書の“放蕩息子の物語り”は大変感激的な物語りで、これによって多くの人々が父なる神の愛の大きさを学んで来ました。

今朝、共にミサをささげるためにここに集まっている私たちは、一同で“回心の祈り”を唱えました。私たちは「死んでいたのに」(v.24) キリストによって生き返らせていただき、「いなくなっていたのに」(v.24) キリストによって見つけていただいた、そのような罪人であることを告白したのです。“神の息子と呼ばれる資格”(v.21) のない罪人の群が、司祭の案内で神の前に出る……。

「しかし、憐れみに富む神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、……」(エフェ 2:4-5)。

……それがミサを共にささげる教会の本来の姿であることを、深く思ひましょう。

「見失った羊」(v.6) も、「無くした銀貨」(v.9) も、自ら悔い改めることが出来ないように、この放蕩息子が再び父(なる神)のもとに帰ることが出来たのは、決して“彼の悔い改めの立派さ”によることではありません。神が私たちを見つけたし、先ず神が私たちを愛してくださったから、罪人である私たちも“回心の祈り”を唱えることが出来るようになったのです。

「……あなたがたの救われたのは恵みによるのです。」(エフェ 2:5)

2. 出

アロンの金の子牛の物語りも、私たちキリスト教会のミサの“回心の祈り”の意味を教えてください。

v.10 「今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。」

神が滅ぼし尽くそうとされる民……、それが神の民イスラエルの本来の姿であるという理解がここに

はあります。しかしアロンの子牛の物語りにはモーセの執り成しがありました。紀元前8世紀のイスラエルの預言者アモスは、「見よ、主なる神は罪に染まった王国に目を向け、これを地の面から絶たれる。……見よ、わたしは命令を下し、イスラエルの家を諸国民の間でふるいにかける。……わが民の中で罪ある者は皆、剣で死ぬ」と語りつつも(アモ 9:8-10)、なおヤーウエの憐れみに期待しました。南王国ユダの滅亡とバビロンへの捕囚を預言したエレミヤも、なお70年後の神の恵みの約束を語りました(エレ 29:10、代下 36:17-23 参照)。

「生まれながら神の怒りを受けるべき者」(エフェ 2:3)であった私たちキリストの民には、罪の赦しがあります(エフェ 1:7、1ヨハ 2:1-2)。

3.1 テモ

v.15 「“キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた”という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。」

これは、教会が今日に至るまで受け継いで来た“使徒たちの教え”です。ミサの開祭の中の“回心の祈り”は、このようにミサ全体の本質的な構成要素の一部であって、「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さ」(エフェ 3:18)へのひたすらな信頼の告白なのです。

アーメン、ハレルヤ。

9月23日 年間第25主日

アモ 8:4～7 | テモ 2:1～8 | ルカ 16:1～13

1. ルカ

vv.8-9 「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」

この「主人」は管理人の主人である「ある金持ち」ではなくて、主イエス御自身であることに気付くと、私たちには現代の教会に向かって呼びかけておられる主キリストの言葉が聞こえて来ます。この世の人々が彼らの仕事に示すのと同じぐらいの実際的感覚を、神の仕事に示す人々を主は求めておられるのです。

私たちが永遠の住まい(神の国)に迎え入れてもらえるような仕事、友達作り……、それこそが第二バチカン公会議が再発見したミサへの“共同体的な参加”でありました(典礼憲章 26-32)。キリスト教会の歩みの歴史において、それは「現代人に対する神の摂理の格別な配慮のしるし」であり、「聖霊が人々を恵みの泉に近づけようと、現代の教会を訪れてくださったのです」と、教皇ピオ 12 世は述べています。「この神の民は、その起源において聖であるが、感謝の祭儀に意識的、行動的、効果的に参加することによって、聖性の中に成長し続ける」というローマ・ミサ典礼書の総則(前文 5)の言葉は、正に今朝のルカ福音書のテキストの解釈そのものなのです。

2. アモ

新月祭も安息日も、預言者アモスの時代のイスラエルではヤーウエの祭りの日でした。アモスが見た第四の幻では、これは富める支配者や商人たちの不正への神の報復を語っているのですが、今朝の私たちの日課ではこの世の仕事への彼らの熱心さという一点だけが注目されているように思えます。それがどんな仕事であるにせよ、「ミサは何時に終わるのか……、早く帰らなければ……、私は忙しい……」とやっている私たち自身のことを指しているように聞こえるではありませんか。

しかしそれは、私たちが非難するためではなくて、この世の仕事へのその熱心さを神の仕事に振り向けることを、主が私たちに求めておられることを訴えているように思えます。

3.

ルカ福音書の物語りの中に出て来た「不正にまみれた富」という言葉に、その理解のヒントを与えてくれる文章を紹介してみようと思います。

第二バチカン公会議による典礼刷新に重要な貢献をしたユンクマンというオーストリアの司祭がいました。この司祭は典礼憲章の起草に大きな貢献をし、その後の各種典礼儀式書の規範版の編集にも関わった

方です。このユンクマンの著書“ミサ”の中で、新しいローマ・ミサ典礼書の回心の祈りについての個所で、彼は次のように書いているのです。

“集会は、司祭の案内で共同体となり、神の前に出る。信頼にみちて神の前に進み出るのである。はじめに罪を告白するのは、ある意味で、そこにうつる影のようなものである。神の前に出る教会の構成員は、罪にまみれた人間たちなのである。”(邦訳 p.199)

“罪にまみれた人間たち”が、感謝の祭儀への“意識的、行動的、充実した参加”へと招かれているのです。

私たちのささげる奉仕の行動も、それを工夫する知恵も、また献金も、聖なる神の前では“不正にまみれた富”以外の何ものでもありません。にもかかわらず感謝の祭儀では、そのような信者の行動的あるいは財的なささげものが、司祭の奉仕を通してキリストのいけにえの奉獻と一つに結ばれるのです。

4.

典礼憲章は、“典礼奉仕者”として“祭壇奉仕者(旧/侍者)”、“朗読者”、“解説者”、“聖歌隊に属する者”の四つをあげて、“それぞれにふさわしい方法で典礼の精神を入念に教え、自分の分担を秩序正しく実行するよう養成する必要がある”(29)と述べています。

現在この浜松カトリック教会で望まれることは、それらの人々が特別な奉仕をしているとしても、彼ら自身は本来“信者会衆の一部である”という理解と、したがってその奉仕者各自の意識的、行動的、充実した参加を育てるということです。典礼奉仕者、特に聖歌隊の人々とオルガニストが、自らは主体性を持たない単なるBGM(バックグラウンドミュージック)の歯車のように扱われている現状は、健全なことではないと思うからです。

典礼奉仕者たちにも、その他の会衆一人一人にも、主イエスは今朝「不正にまみれた富で友達を作りなさい」と語って、各自のミサへの主体的な参加を呼びかけておられるのです。

「永遠の住まいに迎え入れてもらえる」(ルカ 16:9) 教会へと成長出来るために ……。

アーメン、ハレルヤ。

9月30日 年間第26主日

アモ 6:1~7 | テモ 6:11~16 ルカ 16:19~31

1. ルカ

福音書の中には、イエスが来世についての当時の通俗的な概念を利用して語られたと思われる、いくつかの物語りが伝えられています。今朝のルカ福音書のテキストもそのようなものの一つです。

ある金持ちと貧乏人の現世と来世での運命の逆転の話は、来たるべき次の世が“ある”のだということを主張するために語られました。来世とか死人の復活などということ信じることが出来ない人々は、現代と同じように新約聖書の時代にもたくさんいたのです。

来世とは、再臨のキリストによる終末の裁き(IIテサ 2:8)と、神の国の栄光の実現(IIテモ 4:1、テト 2:13)のことです。福音書は、主イエスが語られた神の国の到来の危機についての教えを保存することによって、代々の教会がその警告を聞き続けることが出来るようにしました。それが教会の宣教するキリストの福音の重要な要素だからです。

誤解してならないのは、このような物語りは地獄で燃える炎の有様や、天国の様子についての情報資料ではないということです。だれもそこに行って見て来た人などいないのです。そうではなくて、「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国を思いつつ」(IIテモ 4:1)、教会がキリストの福音に耳を傾けることを呼びかけているのです。

2. アモ

キリストの福音は、“神の裁きを越えての救い”を語っていることを、十分に知る必要があります。

いわゆる記述預言者(その預言が文書になって残っている旧約預言者)の最初の人であるアモスの活動は、紀元前760年頃からの極めて短期間のものであったと考えられています。彼の預言活動の場所は北王国の二大聖所の一つベテルと、首都サマリアでありました。彼が神の民イスラエルに下される神の裁きを語ったために、王朝にとっての危険分子と見做されて、間もなく北王国から追放されたものと思われます。vv.4-6にはサマリアの上流階級のぜいたくな暮らしぶりが描かれていますが、アモスが責めたのはその道徳的是非ではなくて、神の裁きへの彼らの無関心ぶりでした。

v.8 「しかし、ヨセフ(イスラエル)の破滅(の到来)に心を痛めることがない。」

新約のイスラエルである私たち教会は、終末のイエス・キリストによる神の国の実現についての重要な警告を、ここから聞き取らなければなりません。

3. Iテモ

第二バチカン公会議はその最初の公文書である典礼憲章によって、“神のこぼしの食卓がより豊かに信

者に供えられるために、聖書の宝庫がより広く開かれなければならない”ことを規定しました(51)。さらに典礼憲章は“聖なる典礼の刷新、進歩、順応を推進するために、……聖書に親しむ生き生きとした心を養う必要がある”と述べています(24)。

私たち教会は、キリストの福音を聖書から聞く、しかもミサとの固い結びつきの中でそれを聞くのだということ、典礼刷新は新しく教えてくれました。それは今朝のルカ福音書の物語りの中で主イエスが語られた、「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」(v.29)という言葉の意味の再発見であったということが出来ます。

今朝も、共にミサをささげるために集まった私たちは、キリストの福音、しかも神の“終末の裁きを越えての救いの福音”を聞かされています。

v.12 「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。」

v.15 「神は、定められた時にキリストを現してください。」

イエス・キリストは私たちが神の国の福音に耳を傾けることを願っておられます。私たちは今朝、ルカ福音書を通して語っておられる主イエスの警告の言葉を真剣に聞きましょう。

「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、そのことを聞き入れはしないだろう。」(ルカ 16:31)

アーメン、ハレルヤ。